



祝諧本末道

下



天海
印

深川

此本云元禄五年壬申此年酒堂の撰

しとて其個全稿其表小寺一少く

子の辨を意する所なり



深川於遊

芭蕉

まろくも昔き物紙唐辛子

撰て物もささ秋乃あく蹴

尊此月柳のあ月をかくよせく

坊まかいら此先ふきくく

松山の孫と踏躑乃囁くく

酒堂

嵐

岱水

酒堂



培種乃山度とくくく川舟
 菖菘
 移心日の汗かき海小豆粥
 岱水
 りとるはつひとほふあつと
 嵐
 柳と小窓乃より移を括を
 芭菘
 翠の海ふとく下か荷れ社家
 酒堂
 寒徹と山雀筑乃中よりと
 嵐
 正き夏の正風のうらさよ
 岱水
 月乃張ふ先千るふ志てやて
 酒堂
 こささるるるふ移あさ田歌
 芭菘

下二世き

臨海く入落花の雪の朝月夜
 岱水
 那智乃市山のまき道よ空
 嵐
 り初守とらとまきとる身あまた
 芭菘
 荷とるふ馬士れ海へ移と心
 酒堂
 所中のる居ふ赤くまよんとて
 嵐
 吹も志つとくとき移あさつとる
 岱水
 草足代れ小地雪路まきと秋の歌
 酒堂
 依刃あつりれ古くも屋乃月
 芭菘
 玉より乃早苗ときけ八懐しや
 岱水

之勢ゆるくも 砥柱ゆるくも 嵐
 山臥哉 切つてかけきく 雲霧の 嵐
 霞もよめあきぬ世乃中 酒堂
 付合ふ皆上戸ゆき 吾あらし 嵐
 さしゆりしと 雲霞 障一く 袋水
 系物とく 和尙の礼ふあき 酒堂
 今そとあきくあき 道の太日 芭蕉
 樓揚きて 水田とて 雲霧の 袋水
 庭庁の存く 錦くけゆく 嵐

炭俵

不みく川比 鯉對乃 宿の本 綿市 芭蕉
 ぶね抱く 土む土 向乃 曲 突 酒堂
 舟 舟人く 舟とて 舟とて 舟とて 嵐
 維子乃 舟とて 舟とて 舟とて 舟とて 袋水
 此等ハ 好む 坡 孤屋 利半乃 述ゆく 之 福
 七甲 戊年乃 選あれ 曲 節 変化とて 者
 自由 舟 教 狂 神と 舟 入て 子の
 神とて 舟
 芭蕉
 梅ヶ島 小の川と 日 此 舟 山路 舟

天よりし小龍子乃啼声
 九如雲霧行遊其のよき遊小取付て
 上乃よりまゝの小雨うらまの直
 宵乃内けりしとまゝし月の光
 露越くしむと秋のさびしよ
 清涼くそおもはらうまゝとあはれさ
 娘孤望くし人よりあはれ歩ぬ
 奈良かよひ同じ清くあま細基よ
 十六日しき雨の物うぬ六月

野坡 全 芭蕉 全 野坡 全 芭蕉 野坡 芭蕉 全 野坡 芭蕉

新雪より味清取少きう向河岸
 月こころひ出よとお伐石の事
 終宵月影の持病と押くあは
 あはれあやうらまのうらま月
 初雁より葉無下地あててあは
 露露あはれに若人合ひとあは
 所居のほくしと破てあまの陰
 門より押ゆく壬生のうらま佛
 東風より葉無のあまを吹かす

野坡 芭蕉 野坡 芭蕉 野坡 芭蕉 野坡 芭蕉 野坡 芭蕉 野坡 芭蕉

くらりあらしまゝに朧と川らふ
 野坡
 江戸の店先むらひの暮らさむそ
 芭蕉
 ナラシもひねとがう白さうと
 野坡
 方しくふ十おの内のうぬのさ
 芭蕉
 相乃来さうく月さゆらり
 野坡
 門志りくきさうてぬらる魚
 芭蕉
 月らくまてまらうくさう
 野坡
 神平小女と房の親子拾葉で
 芭蕉
 又十のさうも海女一軍一人
 野坡

江戸乃湯浴をい送らふさうこの
 芭蕉
 ありも海をさうくさうまら此を
 野坡
 これたおち東乃方小女と房あけ
 今
 魚小吟のあ〜まら乃籠ら
 芭蕉
 んさう鳴〜お〜ゆらさう
 野坡
 未さのさうのさうてぬ舞用
 芭蕉
 障〜も知〜さうと嫁はあて
 野坡
 屏風乃流下〜さうさうり
 芭蕉

涼菟乃歌仙

神風館涼菟を古き人の門人ありて翁没後拍
子みぬあやとりとくく西風とがくく暮夜化と志と
とるぬの綱を矢つと

涼菟

格別なまよひぬくくやを牡丹

きくしの船くくく雪乃乃仰山

さくの槌おぬるよふを吹く世

重み六條の路くくりまあり

可行

紀之

惟由

下三十八

豆中ふおひよまよるぬ月うあれ

小き乃乃く風さ川とゆ

浪のやう指し持のぬえれく

境のく乃乃のふ荒てかくむく

笛の音乃乃ひやうく小世波をよ

明日乃乃ちまの星のちらし

今一遍肩つて見る心漸回乃稽

うしろふさあわくく園を解ひたり

誰か乃乃若くすと大まよりよかこまり

白歌

杜莫

柴友

涼菟

可行

紀之

惟由

白歌

杜莫

場秋あひまのしる 鶯のけし
 ろう張乃て修まきて鬼かろ
 ちやし時不後も脊中しも
 酩の過る小僧を連くあふ
 あまやとそ籠子う啼て飛ふ
 寺てけし鳥乃路のきふる
 かりれきかかぬの石 白
 鼻のきくあきても云月丸探
 弘法極しやるる 湯杖 涼菘
 柴 莫 白歌 惟由 可行 紀之

下三十一

物らうと落しとく老の舞を
 何を干と年う英むりり けぬ
 物まふとすれと仁王のあふれ
 百日紅乃ハ多 十日 白歌
 若衆乃物らうしと咳をこひ
 空の心ちうら乃そくろく二味線
 風一二月と宵やうお中や
 若一續く西を法輪 可行
 の川をまるとらんちの後の茶籠吟 紀之

祖父と祖母との中へはまじく
係の音なき子の荒ふきこふぬ
白聖とてふあたまの一軒
夏流の土踏ぬ聖帝おらりなり
後るをこそこれハ天初三年
梅乃地あふ雨も晴きまふ小聖物
玉江乃月あせふ小斤破
此段の巻の匂いもさあぐり
涙あふくくく引一柱

狼狽なまはれハ姑のまきあて
持あきりても狼ふりて何年
仕旦の村棚ハあきまらるる巨魁
嘲ときげハそれ七函守りて
指合のあふ小藤おの伯父電
紅裁うらぬ帳此等用
冷食の狼お酔由これ陣あう
杜律此身一きふも三味線
二葉うらるる虎乃芳一く

登る峰をささりておぼろのや輝
かゝる夢の路乃舞をぞ知るささりて
夏地の本音かえりてんささりて
名月小念め入まきりて暮らみ
くゝゝぬ影は麻一巾ノらん
極もささりてその紅葉ささりて
糸成天くささりて叶りぬ
け界ふあゝあゝ老も流しぬ
稚子遙り吸お乃輝儀

衣よ移ささりて乃張るささりての空
風静とあゝぬ梅ささりてひさ

乙由狗峰那仙

麦林舎乙由ハ首さるの晩并や、露後後安と調へ
て枕乃を起せり是又一家の風流ありて化乃ささり
て
落ささりて 在納影仙

在納影仙ハ乙女を田あささりて夏神系
明て涼ささりて此影ささりて

新和乃佐も掛りもおの明く
 酒屋てもあふあふ起し
 老年の遠よりあ乃月もよし
 手合く角力の連漢ふあま
 系おも化糖乃あくぬ清地あ
 うまきとくしとくち常新乃礼
 歳らうる醫者の長尻長羽織
 麻の店りし窓風もく
 洛師乃三十三新も中一休も

美の子乃候り牡丹下て咲
 鶴やゆくもとの新橋よあま
 大工さるらる屋根のあま
 新や詩りし掛男もあつた
 耳も小町りし乃あまの女も守
 咲もあふくをあまのあま山
 手乃掛りしとくしせんあ
 合も新橋あふまのあまのあま
 日あまあまのひらあま

門路の千本実も抱むるは
定しく出づるは乃船起
一時ぬ教よるはさく南をり
系乃湯の悟ひく園崎
那鏡屋はさう又つる月を
鐘流言わく鐘よおとる
比丘丘つん天定く是つるおとる
島て去るる仙臺乃伊達
管あをてさる船の月座

福りはまゝかりの鉄 立
算夏の影を帝位ふよてやふ
際あもりのまゝく機よ形广さる
是實て幸例系証す先合
浄城はらうは河静あつと
招致もさるのむよまゝて
あゝつる夜のまゝ

同對 九九條

或問吾子影は古翁の法則小ほひ具及と慕ふ
く社友と教へ守中の甚き理あるふ能うこれ
と今結西よ復ち古くして志をもて風調一ありき
ゆう一 對て曰茲翁小去行草乃辨ありき
甚き翁よ西區くるわい或の冬の日春の日此調
ふらと或ハ瞻望飄の風吹よりこひ或ハ猿蓑深
川乃神とく何さハ又山麓傍續するものを好む
もあつて一一致一くくは是とこい信純吾流を正
し西麓向ふ小ら能あき造化乃自然を操ふ

教へるは好尚する要小は之一市ハ唯許六乃親信位
ととらハ五老井の辞小曰瞻望飄猿蓑山麓傍
後猿蓑と信く其風辨はさきあふふ能はと瞻望
乃時早麓傍信猿蓑の輕くハ志を成れり
時代乃費と改りて通らとありきハ若猿蓑ハ侃端の
古今合集也神ハ乃人去来ハ猿蓑より至る由流の侃端
小入る一山麓傍信猿蓑ハ其猿蓑のありき
のりけ境より入る神邊名護屋の若分遊人の
瞻望小暇ありきとふ能はと親小底をへらき

湖南の連中の猿蓑小圃をまゝにうたへりし其の
情は真風とゆふとく血脈を継ねあるを何そ
情は凡をゆひ自色小流行をゆふと師の取
附流行まゝにゆふと師の悲は依く名紙取
しゆきい座を合らぬも理はは塔より(玉更に
仇諧の座をわくとそ中育りけぬ作者日少く
古く成りゆふと先師存生の時ゆふと作者の
早と世家ゆふと人一人時作者とゆふと其の人何と
あくゆふと師遷化の後集を出しゆふと下もの

尾を出し初ら此小嘯ら終其人も力をあつて遊
小俳諧とあつたり又亡人の数小入ゆふとハ一を
名を天をまゝハ未代朽るゆふとはは俳諧小派
まゝ其ゆふと数出ゆふと後意夜止るゆふと力
まゝ人のあつたゆふと只よく死ゆふと終る
長生の形あつた速小俳諧を止るゆふと寂蓮
法師小ゆふと越ゆふと死をゆふと終る古人
も有るゆふとカ畧これハ猿蓑ハ在る実備ゆふと石易
流行あつたゆふとまけはゆふとちて及びゆふとゆふと調

とくちやととと五方井のえくら費がふして通るま
とくしとの瞻望親の費を格裏ふして又格裏ふ
ら細とめありととらも底を入らぬとて山底格裏
其裏の百変化小格裏と優格裏らの格裏は七と
底とめけをとりと云ふは初らの人の中ら及ふま
小ありととと格裏格裏とよくおわえて人
と親士と云ふ一底のめけぬやまの年しと古くあり
後ハ附合もとと仕覺し趣向は格裏直しとて
小是彼お彼と格裏乃と月も不格裏は及り格裏は
下 四十四

く終儀格裏なるりくくよとありて道具格裏の中ふ一
生きたれやのえとぬ人とありぬ
又向近まふ凡と格裏とら格裏とら格裏の句ありて
格裏の神と格裏とら格裏とら格裏の句ありて格裏の
ハ格裏とら格裏格裏とら格裏 對と日格裏の句ありて
格裏とら格裏とら格裏の神とら格裏の親格裏と
格裏とら格裏とら
格裏の甲格裏とら格裏は格裏とら
格裏 只半格裏凡のうく ころ

桐乃まよき鶴鳴あふ塀乃門
 抽乃むしむうと君と静夜の石
 兼盛山の日影の影あしけ
 田乃よりと云吹入くく鳴の海
 雀子あしけう鳴うらと風乃葉
 是乃る全葉乃吟あしてけ外句面よ切字あまの
 着てあえかす一は皆の切あして切あまうして切あ理
 あり又挨拶切とあふ

古調小葉一掃り掃りれととと

人子家と賞ハさて家ハ年一忘
 兼盛も志見乃能あはせ其清
 是乃挨拶切とあふ
 又同古句のあはれ句延宝二大和ハ貞徳宗因乃風あしけ
 貞上まえ福を以て風を起せるとあふこと虚葉乃あしけ
 早西風乃あしけ一は是くさう句調小からとあまう一は
 とう師ととと 對うく日あく一は変化する小能一は
 と貞上まえ以来の格あつたの誦あしけ一は體あつたあしけ風
 骨のあしけ乃あしけして傳人乃あしけあまうあしけとあしけ

後句の奥乃細乃下とて而て規則と云ふ事いふのありを
又同今中風と云ふ系附句と云ふ事いふ事或は西暦に
く向ふ事いふ事親しくいふ事いふ事いふ事附句の條
とて附句のありをいふ事

附句と云ふ事いふ事家長山附句のありをいふ事
そとふ上も乃連句の他人の中よとていふ事
いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
中句のありをいふ事
とていふ事いふ事いふ事

別能く云ふ事いふ事人化をいふ事附句のありをいふ事
くと云ふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
句小の乃連句のありをいふ事
て並に云ふ事いふ事いふ事いふ事
く付くと云ふ事いふ事いふ事
ありありと云ふ事いふ事
ふん云々と云ふ事いふ事
とよく七部書と云ふ事いふ事
又問意の附句古詞と云ふ事いふ事

く支考ら古今抄と撰し其外家く小秘く芭蕉式
と定ては剛とふさうあまいと今あくまといふ衣の類と
の格ふの遠あること久し一支考ら海とくちまをうつ直
抄ふく程とりひさうしてあてはるる虚小落くく其あ
一支考云依世階の上のふさうをさうくく又云虚小居く
実小好く実小居く虚小好くありあま又依世階の依世
平治小好くはく乃臨世階人乃はるよりあまを古
乃く繁小あく依世階乃化小値く何そふ小虚実
あらんたや言くく四内初りれ百あまは是天の實りて

虚考くといえやよふ虚とくくく種はよほせんくいあ
乃其の事あらんく虚とくくくくくくくくくくくく
虚とくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
虚とくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
場あてて耐く傷小扱く虚小居く実小あまといふく甚癖
論子く又俗談平話と正せく彼述三十二條小も書かう平話
小好くといふあまを遠くや必しも蕉門の大及小志のく論論と
初く一唯け及小好くくくく化小好くくくくくくく
まらくくくくくくく

又向吾子ら若き者の名を秘さるや漸古すれハ待て以
禪を以て仇と待と禪と何そ一ありん 對てく日汝
何そ古る者の道を輕視さるや若詩歌速讀する百
家の名不詳くも中由と待ハ杜李ら風骨と保く也
一杜律五言五言枕とす盛唐の正風ハ其心腸とる川せ
る又禪ハ佛頂禪師の言よ今くひるを周禪の法師
あり一氣終壽生さる勢ありと保く親とむり以
めく其酒徒余使の悟るに至てと保古詩も仇も品
とかりとく悟るの場等一幸ふ古る乃乃及を信とる

や和歌ハ西行上人乃洒落ハ多少ハ連歌ハ宗祇兼載
乃正歌と傳く儒の竹の非よ道ふらとそあすといふ
事ありく抱いと云々の所は信を疑ふも一く得當
と求むべく唯々事迅速乃らうのそい世公悟るもく
るも事なりくの歌てくもあもむ其極とく其及
真一未代者難くは徳士さりのたに
又向吾子ら正風正論とる世俗よ遠くのまのゆとく
乃正と候くくくも他くり入吾子ら付白存も古も
くとして平易あぬ世人の云徒事ありく如何 對て

曰君もとよと法學の祖甚ふしく稍く家術此のとりおよ
 ぶまうつ山風の精と糸糸して替入事一年ありと忽ちと
 く古きもの法を愛とおのふむし一為世園の柳の以加
 州を運次の方ふふまは法精をく早馬小鞍と名けて松
 任とよとよと糸糸ひまうとく秋風竹と吹る也過行堂の
 飛寒を法凌よまうりれうとよとよの法をあるう白と法塔の
 小袖又草鞋の料とて入金衆許両とくらぬふおの目録
 之乃程法うねとから法けさうものそ方お南といぬ
 まふり先風人よんおうねく空を懸まむううとまうの程又

運城乃程ゆとまをちまう二田はよ法運ひと詮まこのあ
 まり程士乃法法ははくおすうの法とあけまといふ
 之風海の友まれの形辞しゆうそと法類こを知ひく
 之くあひしとまの法吉西行上人の報指と杉松のよ
 梅松かう門かろの更古小扱やまこし一且頼朝の余
 と宵きと給うと法切るまは法よお車の内後とまう
 後車の織まこし

歩ありあうの杖一実好法あま

のお織とあしのかうと三石のまうらまふけしとく祝諧の

昔人のつらみのを知らず乃ゆ土甚多しと云ふを補ひ
其過を正しめんと云時惟明和七庚寅年
五月廿二日

附

祿を辞して風雅を極む

池田氏

米くも人よハ遊てむるを

二川

船島や市の埃乃きくぬ先

雪柴下
白推

初言や薄くしき水のよ

菴
麻父

せ茂のうれて

暑き日や風雨も欲乃恥し記

烏角

寺勢を漲りて

の字よとく此字も病を夜を

九三軒

右五子者越富城之先人也

春之部

竹と別る音小梅散る日影哉
三月月や撒さうせハ入かて
雪乃登よりハ心も細音哉
うく祢の夏又盡きや春の雨
雪り穢あく詠な紀朝う菊
春雨や居眠るハ為の癖あう
山多れ羨まきさきー 朝霞

京 茶良亭

美濃 冷五

金府 六子

同

敷風

小松

百史

能州曾良

岸芷

同七尾

寸洞

下五十五

剣賣て耕は今乃昔や安ー

滑川 七人 知十

若麻九 俵房

來明

武州 鳩巢

柳風

生地

大器

滑川

文史

同

梁明

同

北牙

小松

一芥

同

羅嵐

片耳ハ忘れて春の雨中う羽
下野乃花の枝折や旅度り
奉向り人童子又先ふ春の山
ものよハニは落て花のうー此山
立山や岩漱壁よ喜此日ハ落
蝶の翅已何やー冬も木の風
り厚や産と凌さ雲下消へ
雪もれうーれて竹乃落際う菊

菜の花や若燈のありし此夜
 百歳をばうく祝くし多敷
 小梅やある日八宮もち里交り
 鶏小陽火くともゆれ垣根う那
 雉子鳴や寺の傍ふる草花中
 海棠とすま差する胡蝶う那
 八重辰雨はハナなるな花の山
 凍糸や門田の芥を搦む女
 夜雨晴きて旭り光る木目哉

八尾 夫中

井蛙

越後堀内

徐之房

尾刈半寛坊

也右

越前丸岡

梨一

黙笑園社中

祖梅

父竹

冬吾

藍如

喜くらぬ耽り侍と草花つら
 春雨や阿や免のほき酒あり
 梅咲やあまうきもの雪計里
 乙香や香海系浅行度り
 一家を宵戸門せハ一唱蛙
 嘗や花の吹雪も才をすわめ
 里の子れ庭へ遠する春日哉
 菜の花よあころれ移み女子う
 千本とハ救くの名や柳梅

芦風

至峯

如邑

百事

右石

路一

甫人

古童

翹遊

猿引乃已と狂ふつかてう那
 猫の子此組ふせまうりそんま鞠
 喜五や入るうと洗ふくまう堀
 海棠も眠光しき喜の末
 肉佛ハる守と粧く彼岸哉
 吉野ても喜ふ喜ふ朝うすこ
 噂ふと鳩退ふてやる櫻うふ
 芳野見し人又同や籠月
 僧初より跡る振あり櫻の花

羽白
 乙人
 鳥交
 圓く
 本江 佳邑
 不ト
 四方 以文
 日 風馬
 日亡人 北仙

下五十七

おそろし起うやう出て柳哉
 蜂の巣又狩古寺と松より
 柳咲て物の細く山路う那
 若草や荒りハ里乃垣外り
 梅咲て二日三日の氣さうさ
 若菜挿袖うう雪を解よりり
 今散るも指の雨や籠子此を
 今風流乃撰集と賀しうて
 亦も又本集し乃又起るま

大坪 只泉
 桃李
 古樵
 只侯
 小杉 松夫
 草島 子文
 壺竹
 東桃下 只尺

夏之部

むしやくと麦梅喰ふ臺う那
子総や阿のう海を啼返り
五月五や泥うは馬の腹
おりのすに筆延ん五此音
かゝる女ん花なき指詠免り
涼しさや青海原り月心ら
啼きて蝶乃尿ちる日影哉
水さそふ白藻のたの清きうら

南柳亭

素山
金府

春坊

蝶阿坊

羅門

高岡
北嶺

月
國馬

小松
佛仙

浦本
魚日

下五十八

蘭の香小茶園の花乃移床
待まむううみハハそわそわ
初蝶や並木よ息ふ僧おとり
喜ハ花秋と月ならほとさ次
津めさけハ庭よ流る管う那
螢火も讀そんむと待夜哉
夕魚のかえるすてれ住居兼
後よとハ長きあろろや芥子花
涼しさや踏田下りる水の音

大坂
似鳩坊

信州
麥秀

同
石鳳

四方
荷一

日
荷鞭

日
右直

小杉
一翠

本江
佳川

小泉
里遊

上より飛んで下りては清み哉
 年の暮る道も朽をれと女良也
 石もより又草もより夕涼に
 独り居の借も浮世れ蚊をうふ
 舟よせよ月入る物の隅をよ記
 秋しく水鳴き山を猿啼し
 月退ふて欠くる小舟のゆれ哉
 唇の香いと待夜の寐覚る那

秋の部

尾州 曉臺
 能州 芦峯
 八尾 鹿鳴
 同 月睡
 社中 蘭芝
 加興子 周吾
 加逸

下五十九

薄小をほそく吹たすすを船の秋
 風流も芦乃葎や鳴河麻
 晒半次雲とりたり秋乃山
 雨の山路麻又六十ハアア
 昔あさ日と蜻蛉の体とるか
 秋の日にこの同ひたぬ別業
 村端に木槿乃花や並れ月
 蓑虫乃吹きくして宵夜くれ
 紅糸せぬ木を何くそ後の月

同 至永
 魚津 茶夫
 高岡 碓上
 三日市 白由
 信州サカキ 六雅
 越後 葛波
 金城 見羅
 半化坊
 西本江 桃李

故と知て喰せしを放生會
 十六夜や目たくく肉は是はく
 影いさきと尋れ上の夜をうけ
 干物よまろぬ夕日や木槿垣
 川音の中成通はや麻の夢
 雨あは実よりさるる蒲萄哉
 菊の香も雪とぬりてや初対面
 名月や遊りぬ人も緯の上
 唱やいよと産禪乃石は秋の虫

沙文
 夫扇
 栗里
 菊文
 竹舟
 如琢
 花友
 竹右
 社中
 如是

辻番乃世合くる夜さゝ哉
 岸芝

冬之部

雨寂り竹の音阿る教は言
 音障もあゝぬも沙のおりては
 祭考をたくせる人もぬり哉
 木枯や朝は初菜のかゝる音
 築山乃寐姿あまれ冬の月
 要斗り跡は跡りて枯壁哉
 富士と見る日和ハあはと枯壁なる

金府
 一舟
 日 松更
 日 地柳
 四方 播州姫地 左吉
 日 伊水
 日 如猿
 日 松花

暖磯、新入誘ハヤ初時雨

新得 二得

湖の歌見物、侍言見り那

梅里

風鈴と踏む音、阿りそそさうい

怨秋

餅花乃書久しき及免一が

社中 白雄

芦花く管登り流るれ阿る哉

蘭路

六十れと習も阿り冬籠り

加逸

四季

談笑園

踏分一、起りや落し鹿の角

加興

舞舞とくきくくそえゆれ夏の山

全

下六十一

子と脊よ木綿車に夜を裁

全

狐火や枯野く系を夜もす

全

俳諧書林

寺町通二条上町

井筒屋在云傍

寺町通二条下町

野田 治云傍

西堀川綿小路上町

西村 市原屋

三條馬丸通西下町

八幡屋勤之郎

